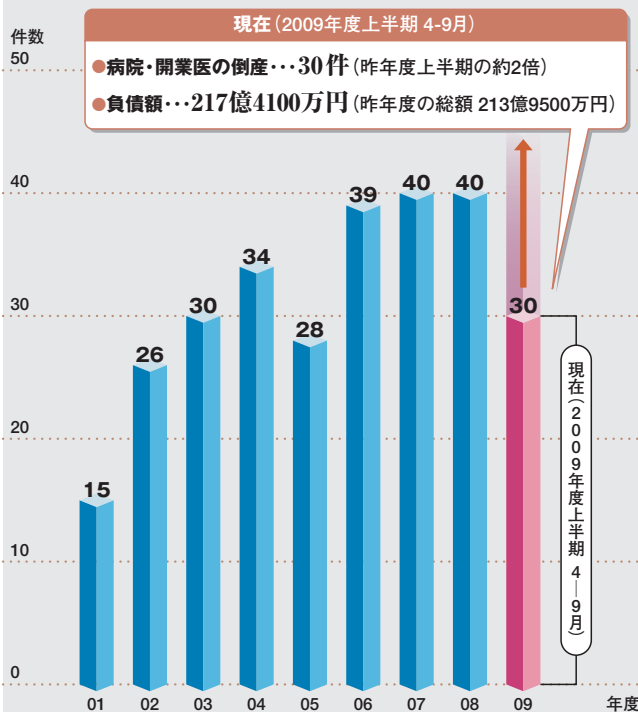


医療機関の倒産件数推移 (2001年度～2008年度)



出典:帝国データバンクより編集部作成

## もはや「聖域」 ではない銀行の 「病院向け不良債権」

株式会社フィナンシャル・インスティテュート  
コンサルタント

前田 健二 Kenji Maeda

E-mail: maeda@financial-i.co.jp

**病**院向け不良債権が聖域から外されつつある。銀行の病院向け不良債権は、最近までは一般に「聖域」と

一に扱われず、特殊な事情を勘案されるべき不良債権として扱われてきた。つまり、病院は企業等の営利法人と違い、地域住民の命を預かる非営利法人であり、銀行向け不良債権を銀行の都合により処理してしまうと、医療の提供そのものが出来なくなり、ひいては地域医療を破綻させてしまう。よって、銀行はむやみやたらと病院向け不良債権を処理出来ず、「聖域」として慎重に扱ってきた。しかし、長引く景気の低迷や、診療報酬の大幅な伸びが期待できない時代を迎え、病院の不良債権が、そろに「聖域」から外され始めている。

以前は、病院は銀行にとって極めて優良な貸出先であった。診療報酬が右肩上がり伸びていた時代は、病院は倒産も少なく、キャッシュリッチで取りっぱぐれが少ない。それゆえ、たとえ病院が一時的に経営危機に陥っても、銀行が追加融資等で支援すれば、それなりに病院のゴーイング・コンサーンは確保された。しかし、病院を取り巻く近年の経営環境は厳しさを増し、最近では民間病院の大半が赤字に苦しむようになった。特に、地方の病院などは医師不足

問題と相まって、いよいよ経営が厳しくなり始めた。

さらに、銀行以外にも、病院に医療機器を納入しているリース会社、医薬品・医療品卸、検査会社、給食会社といった、病院に少くない営業債権を有している会社も病院に対する与信管理を厳しくし、従前のような「甘いつきあい」を続けることが困難になってきた。以前であれば、なんだかんだと病院の支払滞りがある程度容認していたそれらの会社が、病院の経営が危なくなるやただちに納入をストップしたり、あるいは支払が滞ったリース機器を病院の現場から引き上げ、病院の運営を立ち行かなくさせるといった事態すら発生し始めている。

とどのつまり、今日は、以前のような病院の「甘い経営」が許される時代ではなくなったというのであろう。筆者が知るところでも、例えば某銀行が、大口の病院向け不良債権を債権者による破産申し立てにより処理しようと検討し始めている。実際に、銀行による病院向け不良債権処理は今後間違いなく増加する。病院経営者は、今こそこの事態を真剣にとらえ、自院の健全な経営の確保に努めるべきである。病院向け不良債権は、もはや「聖域」ではないのである。